

マイクロ・アグレッションと私たち

～分断から動き出す交流～ 8

朴 希沙(Kisa Paku)

前回は、在日コリアンのためのサポートグループ「それが一人のためだとしても」の実践から、日本人参加者が在日コリアンと出会った時に生じた感覚―「うぎゃー！感」について取り上げました。今回は、その「うぎゃー！感」がどのように変化したのかを見ていきながら、マイクロ・アグレッションを乗り越える対話について引き続き考えてみたいと思います。

◎はじめに ～前回のふりかえり～

これまで、この連載ではマイクロ・アグレッションの具体例を取り上げながら、その概要を解説してきました。そして、前回からはマイクロ・アグレッションの解説にとどまらずその一歩先を考えるために、マ

イクロ・アグレッションを乗り越える対話の実践例として、在日コリアンのためのサポートグループ「それが一人のためだとしても（以下、しもの会）」の活動を取り上げています。マイクロ・アグレッションについて論じる際には、基本的にその被害的な側面に焦点が当たりがちです。というのも、マイクロ・アグレッションは一見非常に些細で日常的なものなので、「とるにたらないこと」「敏感すぎるマイノリティが騒ぎ立てていること」と捉えられやすく、その深刻な被害と影響について生物―心理―社会的側面から丁寧に論じられる必要があるからです。

しかし、マイクロ・アグレッションを乗り越えていこうとする際には、マジョリテ

イについて考察することが、欠かせなくな
ります。マイクロ・アグレッションの多く
が、構造的に生み出されている無知や無意
識的偏見、そして差別心から生じてくるも
のだからです。

一般的に、学校や職場で行われる差別に
関する人権研修等では、悲惨なマイノリテ
ィの被差別体験や、マイノリティの文化を
知り、学ぶことに焦点が当たりがちで、マ
ジョリティそのものやその加害体験、マジョ
リティ文化とは何かといったことを考察
する機会はあまりありません。そんな中、
『真のダイバーシティをめざして—特権に
無自覚なマジョリティのための社会的公正
教育—』（ダイアン,2017）はマジョリティ
（この書物では「特権集団」と訳されてい
ます）の属性や発達について考察し、社会
的公正のためにマジョリティが変化するた
めの可能性や要因について示唆に富む考察
を行っている稀有な本です。私は、数人の
友人たちと今年度から毎月 1 章ずつ、この
本を読んでいく読書会を行っています。

今月の内容は、「特権集団にとっての抑圧
の代償」です。ここでは、社会変革に向け
ての取り組みを生み出すひとつの方法とし
て、構造的な不平等によってマイノリティ
（被抑圧集団）だけでなく、マジョリティ
（特権集団）がどれだけ不利益を被ってい
るかを論じ、特権集団に理解してもらうこ
とが目的とされています。その代償は、私
達が想像している以上に多岐に渡っており、
本書では心理的代償、社会的代償、道徳的・
精神的代償、知的代償、物質的・身体的代
償といった観点から解説されていきます。
不平等な社会構造について考察する際、特
権的な立場にいる人にも実は多くの損失と

代償が存在するのだということに思い至る
ことは難しく、むしろ不平等な構造から特
権的立場の人々が得ている利益に注目がい
きがちです。しかし、ネルソン・マンデラ
はこのように言います。

「抑圧者たちもまた、被抑圧者たちと同じ
ように解放されるべきであることを、私は
何よりもよく知っている。他者の自由を奪
う者は、憎しみの囚人であり、偏見と狭い
心の檻に閉じ込められている。私の自由が
奪われているとしたら、私が自由ではない
のと同様に、もしも私が他者の自由を奪っ
ているとしたら、私は真に自由ではない。
抑圧者も被抑圧者も、同じように人間性を
奪われるのだ」（Mandela,1994）

マイクロ・アグレッションのような社会的
抑圧を乗り越えるためには、マイノリティ
だけでなくマジョリティの変化にも目を向
けていく必要があるのです。

さて、前回は「してもの会」の実践から、
在日コリアンに出会った際に日本人に生じ
る「うぎゃー！感」を取り上げ具体的なイ
ンタビューとともに紹介しました。「うぎゃ
ー！感」とは、「してもの会」の日本人参加
者の間で生まれた流行語で、在日コリアン
との対話の中で日本人に生じてくる独特な
感情を指しています。これは、これまで「一
個人」だと思っていた自分が実は社会的存
在でもあることに気づき、受け入れる際に
生じると言われています。例えば、「してもの
会」で在日コリアンの悩みを取り扱い、
その悩みの背景に存在する日本社会の状況
や家族史などを話し合っていく課程で、日

本人参加者たちは、日本社会や日本人が在日コリアンに対して抑圧的であったり差別的であったりすることに気づいていったと言います。そして、それに気づいた時に「自分で選んだわけじゃないみたいな感覚」や「自分も（抑圧者としての）日本人は嫌なのにとか、否認して押し付けられたくないなって思ったりする」気持ちが出てきたりしたと言います。しかし、このような感覚は在日コリアンと日本人との間に存在する分断や葛藤について曖昧にせずに取り扱っていく中で、次第に変化していきます。

今回は、この「うぎゃー！感」がどのように変化していったのか、その変化を支えたものは何だったのかを考察したいと思います。

◎マイクロ・アグレッションを乗り越えるために～「してもの会」の実践から 続き～

・「分断から動き出す交流」

さて、このような「うぎゃー！感」は、在日コリアンと日本人との間に存在する分断について曖昧にせずに取り扱っていく過程で、次第に変化していきます。私はこのような、立場や属性の違いをあいまいにせず、分断について取り上げ、ともに悩んだり話し合ったりする交流について「分断から動き出す交流」と呼んでいます。それは、例えば「してもの会」では以下のように語られていました。

D さん：分断とか違いみたいなのをさ、人間関係のなかで認識すると、ネガティブなもの

として語られちゃうでしょ？「一緒だよな」っていう方がいいっていう風になっちゃうじゃん。でも、そうじゃない。違いとか分断みたいなものがあるっていうことを踏まえるから、始まる交流があって。ほんとは、一緒だよなって言ってた方が、交流しにくいことっていっぱいある。ほんとに人と人が出会ったりする時って、違う部分とかはつきりさせた方が、すげー出会えるんだなみたいな感じとか、俺は持ってる。持ってるっていうかもともと持ってたわけじゃなくて、この会を通して持ったっていうか。

E さん：うん、お互いが諦めなければ。

この連載でも何度か言及してきましたが、マイクロ・アグレッションの一形態として **Microinvalidation**（マイクロな無価値化）というものがあります。これは、社会的属性による被差別体験を含めた特有の経験やリアリティを排除したり、否認したり、無価値化したりすることを指します。それは、人種差別撤廃を訴える有色人種の人に対して白人が「何をそんなに気にしているの？私はあなたを有色人種として見たことなんて一度もないよ。今は皆が平等に、成功する機会を持っているのさ」といった発言をすること等が例にあたります。これに対し、川浦(2004)は、「抑圧の体験が本人によって語られ、それが共感をもって他者に理解される。このような“リアリティの共有”がエンパワメントの基礎となり、セルフ・エスティームを養う土壌となる」ことを述べています。つまり、在日コリアンと日本人のように、現在の日本社会において抑圧が生じ得る関係性においては、互いの違いや互いの間に存在する分断を曖昧にするので

はなく、意識的に認識し共有する必要があるのです。なぜなら、その作業を通してのみ可能になる「リアリティの共有」が存在するからです。

・「人間になっていく」

「してもの会」の日本人参加者は、このような交流の過程で、少しずつ変化してきました。

Dさん：(日本人に対する批判を聞いたときに) やっぱり反発があって。でもそこで反発してる自分ってほんとの自分じゃない。他者から言われてなんか刺激されて言うだけの話で、そこで日本と一体化して、日本の側に立って、色々反発してみたりしてもしょうがなくって。責められる側でもあり、日本の中で嫌だなんて思ってきた側でもあったりするわけじゃん、自分ってほんとは。そういう多角的な立ち位置みたいなものがあるんだけど、最初はあんまそうも思えない。でもそういう立ち位置だっちはっきりちゃんと客観的に思えたときの方が色々とり扱いやすくなったりするのかなっていう気がして。だから楽になったりする感じとかってあるのかなって思うし。(中略)あと、楽になった上で、パワーっていうか、可能性みたいなのも同時に出てくる。

そして、このような、自分とは異なる社会的属性を持つ他者と出会うことを通して、まるで自分は「人間になっていく」ようだと語る人もいました。

Fさん：ほんとにしゃべっていると、視点をもらえる。自分だけで考えてたり、日本人とばかりつきあってたら、絶対分らなかった視点。(中略)自分から出られないみたいなことの方が、苦しい気がする。

Eさん：「人間になっていく」というふうに、前Fが言った。

Iさん：前Fさんが「自分から出る」とか、「人間になっていく」みたいなことを、言ってたけど、それはどういう意味ですか？

Fさん：(中略)ほんとは、自分の感覚みたいなものが広いはずなんだけど、すごく狭められている感じがして。(中略)「人と共に生きてる」ということとか、そういう感覚みたいなのが…もちろん今まで得たこともあるけど。例えば恋愛とかの中でそういう感覚を得たような気がしたけど裏切られたとか。…うん、「共に生きる」という感覚のような気がする。「自分から出る」とか、「人間になる」というのは、人とのつながりを感じるとか、そういうことなんだと思う。

ここでFさんは、日本人との関係の中では「絶対分らなかった視点」を在日コリアンの悩みを聞き、それを理解しようとし、共に活動したことによって得たと言います。そして、その視点を得たことによって、「自分から出て人間になっていく」とつまり、「自分の中に閉じこもって人が分からない状態(Fさんより)」から、「人とのつながりを感じる」、人と「共に生きる」ことを感じるようになったと話します。このような感覚は、在日コリアンと日本人という立場が異なる、もしくは対立しあう可能性のある関

係の中で生じたものです。

立場や属性の違い、そしてそこから生じる分断は、一般的には取り上げるべきではないこと、気まずいもの、タブーなものとして扱われがちです。しかしそこには本来可能性があると思います。日本人参加者は、在日コリアンが示す問いかけに対する応答を求められる中で、自分とは確実に異なる「他者」の存在を感じたと言います。そしてその「他者」に答えようとする時、今までの「自分」から外に出ていくのです。

一昔前、「自分探し」という言葉が流行りました。ここでFさんは、「本来の自分らしさ」を見つけ、『自分の内面』に『可能性』や『個性』や『やりたいこと』などを探し求める（速水、2008）」この考えとは、全く異なる視点と価値観を示しています。ここで語られているのは、自分を見つけることではありません。むしろ、自分から出て他者に応答することによって生じる視野の広がりこそが、自分を「人間」たらしめているのだということが、語られているのです。

今回は、マイクロ・アグレッションについて、その被害から一步進んでマジョリティの変化に焦点を当て考察してきました。今回は、マイクロ・アグレッションを乗り越えるための対話として、「してもの会」の活動やそこでの人々の変化から考察した「Respectful Racial dialogue」について紹介したいと思います。

・参考文献

川浦佐知子(2004). 語りの力学——セルフ・ナラティブ(自己物語)を通してのエンパワメント——. 人間関係研究, **3**, 122-134.

ダイアン・J・グッドマン(2017). 『真のダイバーシティをめざして——特権に無自覚なマジョリティのための社会的公正教育(出口真紀子, 監訳)』, 上智大学出版. (Diane. J. Goodman(2011). *Promoting Diversity and Social Justice 2nd edition*. Taylor & Francis.)

速水健朗(2008). 自分探しが止まらない.

ソフトバンククリエイティブ.

Mandela, N.(1994). *Long Walk to Freedom*. New York: Little, Brown & Co.